

FOTO PREMIO 2009 最新インフォメーション

フォト・プレミオに選出された写真家の皆さんの作品展を、新宿コニカミノルタプラザにてご覧の日程で開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

2009年7月22日(水) ~ 7月31日(金)

刑部信人写真展 「comic」

<ギャラリーA>



■刑部信人 (おさかべ・のぶと)
1984年 静岡県生まれ
2007年 東京工芸大学芸術学部写真学科卒業
www.nobuto-osakabe.com

小橋ユカ写真展 「どこへ帰る道」

<ギャラリーB>



■小橋ユカ (こばし・ゆか)
1979年 東京都生まれ
2003年 カリフォルニア大学デービス校卒業
大学在学中から写真を撮り始める

2009年8月17日(月) ~ 8月27日(木)

菱沼勇夫写真展 「I & I」

<ギャラリーA>



■菱沼勇夫 (ひしぬま・いさお)
1984年 福島県生まれ
2002年 東京ビジュアルアーツ写真学科卒業
2004年 世界文化社写真部を経て、現在フリー

石川琢也写真展 「南下行」

<ギャラリーB>



■石川琢也 (いしかわ・たくや)
1977年 山梨県生まれ 2000年 立教大学経済学部卒業
2001年 旅の記録のためカメラを持ち始める
これまで奄美・沖縄を中心に撮影、今後は撮影対象を広げて活動予定

FOTO PREMIO 2009 今後の募集について

- ・2009年5月末締め切り 第3期 (同年10~12月展示)
- ・2009年8月末締め切り 第4期 (翌年1~3月展示)

- 選考委員：長野重一 柳本尚規 秋山亮二 ゲスト・笠原美智子
- ・2009年度より、応募年齢が39歳以下に変更となりました。

KONICA MINOLTA PLAZA

〒160-0022 東京都新宿区新宿 3-26-11 新宿高野ビル 4F TEL.03-3225-5001 開館時間 10:30~19:00 / 入場無料

<http://konicaminolta.jp/plaza/>

コニカミノルタ フォト・プレミオ通信 No.10
発行 2009年4月1日 編集 コニカミノルタ フォト・プレミオ実行委員会 発行人 浜田圭佐
発行所 コニカミノルタ フォト・プレミオ事務局 〒160-0022 東京都新宿区新宿 3-26-11 新宿高野ビル4F
コニカミノルタホールディングス株式会社 コニカミノルタプラザ Tel.03-3225-5001 Fax.03-3225-0800





KONICA MINOLTA

FOTO PREMIO NEWS No.10

コニカミノルタ フォト・プレミオ通信

2009年4月1日発行

2009年7月・8月開催のフォト・プレミオ入賞者決定!

先日、「フォト・プレミオ 2009」第2期分(2009年2月末締め切り)の選考会が行われ、4名(7月2名、8月2名)の方が新たに選出されました。今回の受賞者の作品は、どのような点が評価されたのか、また、選考委員が作品を選んだポイントなど、選考会でのコメントをそれぞれの作品ごとにまとめてご紹介します。

刑部信人「comic」



—— 一目見て、この作者のユニークな視点を面白くと思いました。

「構図がとても巧みで、何気ない対象や、比較的小さめのテーマパークなどで見出した景観を抜き書きするように撮っています。とても楽しく見られました。若い作者だととても思えないほど、巧みだなと思います」

「日本人は作品にユーモアを込めるといのが、苦手かもしれません。映画でも喜劇が比較的少ないですし、そうした中で、このユーモアのセンスというのは光を放っています」

—— 最近の若い人には、こういうユーモアを見せた写真も多くなってきていませんか。

「意図的にそうしている人はいると思いますが、このような独自の作風はあまり見かけることがないですね」

「作者はそれほど意図的じゃなくこうした写真を撮っているんですが、もともと彼の中にあるセンスが、このオリジナリティを生み出しているんだと思います」

小橋ユカ「どこへ帰る道」



—— モノクロで夕暮れ時を見せるような暗い調子に仕上げた作品ですが、惹きつけるものがありますね。

「イメージのさまざまな断片によって、見る側の連想を誘ってくるというか、感想を委ねている写真のタイプだと思います。見る人それぞれに、自分の記憶や体験を喚起してくる写真なので、引き込まれてゆくんですね」

「とても日本的なトーンで作品ですね。読者と世界を共有してゆく俳句とか、そういった世界の雰囲気を感じ

られます。1970年代に確立された日本写真の典型のひとつという感じがしました」

—— いわゆるコンテンポラリー・フォトグラフィの流れも、日本に独特なものがあると言われましたが、それに共通したところもありますか。

「そうですね。静謐さとか、端正さとか、そういった部分のことで、そういう日本ならではの特徴をこの作品からも感じられます」

「たくさん応募者の中でも、珍しく“湿った”という、情緒的なイメージを定着させた写真ですね」

菱沼勇夫「I&I」



—— けれどものんびり率直な写真で、ジャマイカという国の風土、色彩の文化がよく表現された写真だと思えます。

「旅の写真の場合、ただ何となくその土地へ行って何日か滞在して撮ってきた、というような写真は土地自体に受身になってしまっただけで、“撮られてしまう”例が多いですね。この作品にもそういった部分はあるんですが、海外に行って撮ったというもののなかでは、きわめて楽しく見られました。単調じゃなく、構図や色や、さまざまな要素に気を使っているからなんでしょう」

「自分の目を強調しようとして、対象の世界に引き込まれて撮っているのが、いいと思います。それはふつうなら欠点となるところですが、長所に変えているところが素晴らしいと思います」

—— 自分から作っていくのではなくて、対象の世界に身を任せているということですね。

「今回も外国に材をとった写真が多くみられましたが、それらの作品の中では群を抜いてインパクトがありました。よい例、示唆的な例になりますね」

「プライベートな写真ではない、ジャーナリスティックなドキュメンタリーの写真と言えますが、そこにプライベートなテイストを巧みに混ぜ合わせていて、若い人とは思えない上手さがあります」

石川琢也「南下行」

—— 南西諸島を巡って撮られた写真ですが、同じ“南国”でもジャマイカを撮った作品とは異なる作風ですね。

「非常にプライベートな、作者の気持ちがスッと入っているような写真です。そして“南の旅”らしいとても気持ちのいい写真だなと思いました」

「被写体に寄り添って撮っていると思うんですが、その寄り添い方によって自分自身が写真に出ているんじゃないでしょうか。それほど客観視しようとしているわけではなく、なるべくその土地の人に寄り添いたいという

思いを感じます」

「これらの光景を見て、何か思わせられるテーマが作者の中にあったんじゃないでしょうか。この旅を通じて何かを探していたり、1枚1枚の写真に自分の中に返ってくる何かがあるんじゃないかという感じがしました」



—— “引いている”視線にとっても好感を覚えたのですが。

「そうですね。家族や友達ではない人たちと、旅の短い間だけ付き合っていく中で、それを少し遠慮がちに見ているところが、この作品の魅力のひとつなのかなと思いました」

「プロっぽくないというか、“ジャマイカ”の作者にある種のプロっぽい上手さがあるとしたら、こちらの作者はもっと自分自身の作品という感じになっていると思います」

「ジャマイカと日本の南西諸島、同じ“南国”を題材にしてもまったく方向性が違って、それは写真を見る側にとってはとてもうれしいことですね」

選考を終えて

—— 今回の選考を終えて、全体的な印象はいかがでしたか。

「前回と同様に、やはり外国で撮ってきたという作品が多くありましたね。でも全体にクオリティは高かったように思います」

「ただ、被写体となる“外国”と“自分”との関係がもっと出てきてほしい作品もありました。その(外国の)土地に対する知識というのは、見る側の第三者にはまずないわけですから、自分だけ納得していても写真に込めた思いは他人には伝わってこないですね」

「テレビや映画で見たり、インターネットで見たりと、映像的な部分でも外国がすぐ身近になっているんですが、世の中の傾向としてモニターを通して見ている感じの、あまり肉眼で見ていない気がしない外国の写真が多いような気がします。一部の応募者にその傾向を感じました」

「そうですね。そしてコンセプトを大切にしているのはいいのですが、見ることの楽しさや作品の完成度など、そういう“視覚的な喜び”を表す方法にも、もっと力を注いでいきたいと思います」

—— コニカミノルタプラザのギャラリーは比較的大きい会場ですから、展示構成をも含めた全体的な注意をもっと払って作品化してもらえると、選びたい、紹介したい作品がさらに増えてくるのではないのでしょうか。